

# 反障害通信

21. 12. 18

114号

## 現在日本のファシズムの蠢動、始動？

もうずっと以前から、橋下徹元大阪府知事元大阪市市長がテレビに出て、無責任放言を喋りまくっています。政治家を辞めたとして、コメンテーターの仕事をしていたのですが、以前は自分は維新ではないとしていたのですが、最近もろに維新の広報担当のようになってきています。10月の衆議院選挙で、維新が議席を増やしました。そこにファシズム的なことを感じているのは、わたしだけでしょうか？何が起きているのか？ファシズム論はまだ掘り下げていないのですが、とりあえず文にしておきます。

### ファシズムと親和的なこと

#### (1) 国家主義

ファシストは国家主義者です。ただ、国家主義には、多くのひとがとらわれています。そもそも、国会議員は「国益」なる論理にとらわれがちですし、民衆とか市民でなくて、「国民」ということばが広く使われていること自体に国家主義へのとらわれを指摘出来ます。わたしは民主主義の反対語は国家主義だと押さえています。ここから、ファシズムへの批判を定立させることだと思っています

#### (2) 権力掌握願望

ファシストには「強い者が正しい」という論理があります。そして、何をしようとするのか、それは「(1) 国家主義」的なところであったり、ヒットラーに見られるような人種・民族差別主義的こともあるのですが、それらのことが曖昧であったとしても、とにかく、強者の論理で、権力を掌握したいというところでの突っ走りがあります。

#### (3) 差別排外主義

スケープゴート的な攻撃をしかけ全体主義的な国民統合を図るとというのが、ファシストの手法です。トランプ前大統領がメキシコ国境の壁を作るという形で、差別排外主義を煽りました。その他、数々の差別的言動が指摘されています。

#### (4) ポピュリズム

ここでいうポピュリズムは、一般に「右派ポピュリズム」と言われていることです。トランプ前大統領の「(3)差別排外主義」で述べたことにもリンクし、また「(1) 国家主義」にもリンクする「アメリカ・ファースト」の論理は、まさにポピュリズムなのです。ちなみに「左派ポピュリズム」ということを言うひとがいるのですが、修正主義や日和見主義のことを指すのかも知れませんが、修正主義や日和見主義は左派性を否定することなので、これにはあたりません。ただ、「右派ポピュリズム」は、自らの立場性を曖昧にし、中立性を装うということを常套手段にします。また、「(5)陰謀術策・印象操作」にもつながるのですが、目的の為には手段を選ばずというところで、さまざまなウソ・ごまかしを常套手段としています。

ポピュリズムというとらえ方には、もう一つの意味があります。それは、非論理的であるということです。論理も何も、ひとのとりわけ感情的な、とりわけ差別主義的な感情的な心性に訴えかけるということです。

#### (5)陰謀術策・印象操作

ファシストの特徴は陰謀術策と宣伝技術に長けているということがあります。

#### 橋下徹元大阪府知事元大阪市市長の維新別働隊(政策理念、マスコミ対策担当)の無責任放言

元々、マスコミで放言的発言をする弁護士としてバラエティ番組に出ていたのですが、自分は政治家にならないと言っていたのに、「嘘つきは政治家の始まり」——「嘘つきはファシストの始まり」というように大阪知事になりました。そして、地位をシャッフルする政治術策を弄して大阪市長に移り、大阪の維新の会政治を進めていました。もともと、原発事故直後に脱原発を唱えていて、更に地方自治を唱えて、支持を獲得していったのです。原発はすっかり後景に却けていますし、二度に亘って住民投票をして却けられた「都構想」の考え方は、地方自治を進めるというよりは、東京に対してもう一極の集権政治を作るという代物でしかありません。地方自治の拡大・深化ではないのです。一回目の都構想の住民投票で負けて、政治家を引退すると思しました。ところが、テレビに出て政治的発言を続けています。「地方自治の政治で責任を担った立場から」という発言をしているのですが、責任をもった政治家が、政治家を辞めると言ったのに、なぜ、無責任な発言が出来るのかおおよそ信じられないことをやっているのです。政治ゴロとか政治屋としか言いようのないことです。マスコミもマスコミで、なぜ、そんな無責任なひとを出させ続けているのか、分からないのです。このひとは、勝つか負けるかの論理を振りまきます。一票差でも選挙で勝ったから、支持を得たとするのです。民主主義政治には、少数意見の尊重というのがあるのですが、そういう意味で、このひとは反民主主義です。そんな政治をすると政治不信を招くと思うのですが、そんなことは意に介しません。勝った者が正しいのです。そこには荒廃しかありません。

維新の政治家は次々に問題を起こしています。往々にして、そもそも何をやりたいのか意味不明なのです。要するに権力掌握願望にとりつかれたひとたちなのです。

市職員をスケープゴートとして象徴化した構造改革を進め、それがコロナでどうなったか、日本で人口比での一番の死者を出しています。最初橋下徹元大阪府知事元大阪市市長は、反省とか言っていたのですが、居直っています。おおよそ、責任の概念がないのです。ひとの命を軽んじる政治なのです。最近インターネットで、昔の市民との対話のビデオが流れでいます。また、マスコミのインタビューに最後まで応えてきたと言っていますが、おおよそ対話が成立しないやっつけ主義の脅迫のようなこと、対話など成立していません(註)。

#### 自民党内のファシズム的な動き

橋下徹元大阪府知事元大阪市市長が維新を立ち上げるときに、当時野党だった自民党の安倍元首相と一緒にやろうと秋波を送っていました。結局、安倍元首相は自民党総裁選に出て、第二次安倍政権を作るのですが、自民党と維新は人的な行き来があるのです。安倍元首相自身はその思想性において差別主義者なのですが、個別差別については差別的な発

言はしません。そのとりまきに差別主義的な発言をさせています。そのひとりが、杉田水脈議員です。数々の差別発言を繰り返し、そのあまりのひどさに自民党幹事長から叱責を受けていますが、このひとは衆議院の小選挙区には出ないで、安倍元首相の中国ブロックの比例で優遇されて当選してきています。このひとは維新から鞍替えしてきたひとです。維新は自民党右派から鞍替えしたひとが多くいます。

さて、安倍元首相は「忖度」という流行語を生み出したのですが、もうひとつの言葉を流行らせました。それは「印象操作」という言葉です。これも「忖度」という言葉と同じように、野党の質問者に唐突に「印象操作している」という言葉を浴びせかけたのですが、忖度政治と同じように自分がやっていること、やろうとしていることを思わず口に出してしまったのです。まさに、無内容な非論理的なこととしての印象操作がファシストの常套手段なのです(「(5)陰謀術策・印象操作」)。

#### ファシズムの蠢動、始動？を抑え込むために

今、もっともファシズム的なことを感じるのは維新政治なのですが、それと相俟って、元々自民党の中にもファシズムな動きが出ています。この二つが合流するときが、まさにファシズムの本格的な始動として出てくることで、それ以前に抑え込まねばなりません。色々なごまかしを暴ききり、きっちり批判しきる必要があります。この文もそのようなところで書き置きます。

#### 註

大阪の首長時代に「子どもが笑う大阪に」というテーマで、私立高校の助成金をカットする問題で、高校生との対話集会を開いたのですが、新自由主義的な(そこにファシズム的なことがあるのですが)自己責任論を押し付けるやっつけ主義の「論議」(論理破綻した「論議」)をふりまわし、出席した高校生を泣かせていました。そのビデオは YouTube で観れます。 <https://www.youtube.com/watch?v=3yhPkFeSP5c>

(み)

(「反差別原論」への断章) (41) としても)

#### HP 更新通知・掲載予定・ブログのこと

- ◆「反障害通信 114 号」アップ(21/12/18)
- ◆「反差別資料室 A」「反差別資料室 C」も DVD などの他のメディアでの郵送などで対処したいと思っています。横書き版は最後、の連絡先から連絡をお願いします。
- ◆「反差別資料室 C」で、また見れない文書が出ています。とりあえず、タイトルの最後に「反障害通信」の掲載号数を書いていますので、メインホームページの「会報」の当該通信号から見てください。
- ◆「反差別資料室 C」の「文献室」を、新しい本の購入や読書に合わせて、一年ぶりにリアップしました。

## 読書メモ

これまでの学習で読み残していた本、更に追加学習したものです。農業問題と新自由主義的グローバリゼーション批判、ひとつずつ。

たわしの読書メモ・・ブログ 574

### ・椎名重明『農学の思想—マルクスとリービヒ』東京大学出版会 1976

この本は、エコロジー関係の本を読んでいたときに、何人かの著者が引用したり、参考文献にあげていた本です。そしてリービヒは前の読書メモの本の斎藤さんも触れています。

リービヒの「物質代謝」という概念は、エコロジー的にキー概念になっています。また、農業による土地の肥沃の掠奪という概念は、マルクスが自然概念や土地問題や資本家の労働者・民衆からの搾取・収奪概念ともリンクさせて、『資本論』やその他の著作、書簡などで引用していることがあります。そのことをこの著者も指摘しています。また使用価値ということが商品生産活動だけから生まれるのではない、土地の自然の使用価値ということから、ひとのよって立つ基盤のようなところから、私有財産制の止揚ということにも繋がっていきます。リービヒの理論自体が自然科学だけではなく、自然科学と社会科学をリンクさせた科学として注目されているのです。リービヒは有機質説に対置させて無機質説を突き出し、ミネラルというところで鉱物的なところに留意したのですが、そのあたり、現代農学からとらえかえしてどうなるのか、リービヒ自体は19世紀のひとです。今日の生態学的な観点に通じる事もあり、また有機農法的なところからリービヒをどうとらえ返すか、現代農学を押さえて置きたいとの思いも出てきます(思いに終わるでしょうが)。そして、自分に対する批判を、水車を回す水に譬えて、対話の中で論的深化に進んで行く、その学的な姿勢のようなこともとても参照されることです。

目次を出しておきます。

まえがき

序章 日本の農業と西洋の農業

- 一 ドイツ人のみた幕末の日本農業
- 二 日本式「有機農業」の問題点

第一章 リービヒの農学——その思想と科学

- 一 リービヒの再評価
- 二 自然の循環に関するリービヒの思想
- 三 無機質説
- 四 合理的農業論
- 五 有機説批判
- 六 窒素説批判
- 七 資本主義農業批判

第二章 ローズおよびギルバートに代表される近代農業論

- 一 農業の基本的性格
- 二 ロザムステッドにおける実験
- 三 近代的農業のイデオロギー

- 四 イギリスのリービヒ
- 五 アメリカのリービヒ
- 六 日本のリービヒ

### 第三章 国民経済学的地力概念——J・コンラートのリービヒ批判

#### 第四章 土地に関する思想——歴史的考察

- 一 土地囲い込みの自由——近代的自由の消極面に関連して
- 二 農村共同体と自然
- 三 改良農業と資本主義の精神
- 四 農学と地力概念——歴史的概観

#### 第五章 マルクスとリービヒ

- 一 思想と科学
- 二 人間と自然との物質代謝
- 三 土地の自然力と経済的肥沃度
- 四 洗練された掠奪農業
- 五 資本主義と自然力

[補論Ⅰ] モンショットの物質代謝概念について

[補論Ⅱ] 玉野井芳郎氏のダヴィッド的・ポランニー的物質代謝について

さて、ここでは、主に生態学的観点や、マルクスとの関係に留意して、切り抜きメモを残しておきます。

「つまり自然界の生命現象は人間を含む「動物と植物との物質代謝」Stoffwechsel の過程であり、「人間がいなくても存続する」とはいえ、「人間の加わりうる巨大な循環」ein großer Kreislauf をなしている。したがって、「補充の法則——すなわち、諸現象はそのための諸条件が回帰し同じ状態を保持するばあいのみ永続するということ——こそ、自然法則のなかで最も普遍的なものである。」15-6P

「すなわち当時の「フムス説」が無機質と区別された有機質肥料の効用をいっていたのではなく、すぐれた農学者シュヴェルツ Schwerz ですら「ときほぐせないゴルディウスの結び目 gordischer Knoten であり、自然科学の限界である」といっていたように、有機質肥料の効用を「不思議でわからないもの」としていたのに対し、リービヒは化学的「無機質説」を展開しなおかつその観点から有機肥料の重要性を説いたといつてよい。」34P

「マルクスのいうように、「労働はすべての富の源泉ではない。自然もまた労働と同じ程度に、使用価値の源泉である」ばかりか、「労働そのものも一つの自然力すなわち人間労働力の発現にすぎない」。いいかえるならば、「自然を人間の所有物として取り扱うかぎりでのみ、人間の労働は使用価値の源泉となり、したがって富の源泉となる」のであって、労働をすべての富の源泉とするのは、はじめから「労働がそれに必要な対象と手段をもっておこなわれる、と仮定する……ブルジョア的な言い方」にすぎない。」52P(マルクス『ゴータ綱領批判』)

「つまり、リービヒの批判は、土地——その自然力——は国民の富の源泉であり或いは人類の財産であるとする彼の基本的立場に立脚するものであったし、彼がそのような立場に

たつことを可能ならしめたものは、自然を人間の所有物として取り扱う経済学や法学の立場をはなれ、人間が加わらなくても継続する自然の巨大な循環の中に、自然的存在としての人間をおくという彼の科学的思想だったのである。」 54P

「しかし、「合理的農業」というばあい、自然科学的合理性および経済的合理性を問題にせざるをえないように、農学なるものは、自然科学と社会科学——経済学——という二つの異なる科学による基礎づけをもって成立するものといわなければならない。／そもそも農業においては、対象たる自然が、耕地とか牧草地、或いは改良された穀物とか家畜というように、すでに「人間化された自然」であると同時にそれらに働きかける人間が一定の社会関係のもとにある「類的存在」としての人間である以上、それは当然であろう。／ところでまた、農業においては、自然科学的に合理的であることが必ずしも経済的に合理的ではない以上、農学は科学をこえる思想としての性格をもたざるをえない。農学の思想は、農学において二つの科学が統一せしめられるかなめであり、さまざまな理論取捨選択——価値判断——の基準をなす。」 59-60P

「自由とは、他人を害しない限りは何をしてもよい、ということにある」というのは、フランス革命の人権宣言の中核をなす部分である。そしてそのばあい、「自由」の主体的意味は、「人間の自然に備わった諸権利の行使」の自由を意味するのであった。」 113P

「たとえば、近代プロレタリアートの「二重の意味における自由というのは、本来は自然的・類的存在である人間が、土地から切り離され、共同体から自由となって「無保護なプロレタリア」vogelfreier Proletarier と化した状態をいうものにほかならない。なぜなら、近代的プロレタリアートのいわゆる「人格的・身分的自由」(＝封建的支配・隷属関係からの自由)というのは、とりもなおさず資本の自由の歴史的前提であり、或いは、資本のもとに包摂された労働力の社会的存在状態を表現するものであるにすぎないのであって、したがって彼らが「無保護」であるのは、彼らが共同体から自由であると同時に「生産手段——なかんづく土地——から自由」であることに基づいているからである。」 113-4P

フランス革命における「人権宣言」批判 114-7P

「市民社会の奴隷制……の外見が「自由」にほかならない。」 117P(マルクス『聖家族』)

「人間は、自然に働きかけ自然をかえることによってみずからの自然をかえてきたのであって、そのかぎりでは、自然からの自由(＝自然法則すなわち必然の洞察)は人類の歴史の一面をなす。しかし、自然との絶えざる交流の中でのみ生きる人間は、自然から切り離され、自然の破壊によってみずからの自然力が失われようとするとき、自分が自然的存在であることを意識する。土地の囲い込みや共同地の収奪に対する共同体農民の反抗に現れた自然法的土地共有思想や、社会の変革期(たとえばイギリス革命、フランス革命、十九世紀末「大不況」、ロシア革命等々)に際して、くりかえしあらわれた、自然法思想に基礎づけられた土地公有論は、まさにそのような意味での「自然からの自由」に対する批判という面をもっていたのであった。」 117-8P

「そして実は、「土地は本来人類の共同財産である」という自然法思想に基礎をおく土地公有論には——それぞれの時代におけるイデオロギー的夾雑物をはらいのけてみれば——、資本主義或いは近代的市民社会における生産諸力のあり方(とりわけ、土地や人間の諸自然力が資本の生産力としてあらわれるという仕組み)に対する批判という面が一貫しているこ

とがわかる。すなわち、生産手段(なかんづく土地)と結合した直接生産者たちが、自己の労働の生産物を交換し合う共同体社会という理念(ある種の農工結合体理念)には、時代逆行的な消極面と同時に、近代批判という積極面があったのであって、その意味では、それは、社会変革の過程でやぶれ去った少数派の思想という次元にとじ込めてしまうわけにはいかないものである。」 118-9P

エンクロウジャー批判 119-122P

「そして、近代農業における技術的發展が多かれ少なかれ土地の自然力を奪うためのものであったように、農業における資本の自由は、結局のところは地力掠奪の自由——すなわち共同体や地主的規制からの自由と自然法則からの自由(=自然法則の無視)——にほかならなかった。」 121-2P

「人間が対象たる自然を変えることによってみずからの自然を変えるということは、簡単にいえば、人間と自然——とりわけ土地——とのかかわり合い方の変化は、人と人との関係の変化をもたらしながら、人間自身の自然観をも変化させるということである。」 124P

「生産の「人間的側面」と「自然的側面」との分裂が、「私的所有の最初の結果」であるというならば、資本主義的所有とは、他人の労働にもとづく「剰余価値」の取得であり分配であって、資本の能力としてあらわれる自然の諸力は、すべて資本家自身のものであるということが前提されている。だから「労働はすべて富の源泉である」という「ブルジョア的な言い方」が可能となる。」 125P

「実際、ロシアの「偉大な未来のために役立つことのできる諸制度(注・農村共同体)を救う」ことを意図したマルクスやエンゲルスやナロードニキ、エス・エルの構想は、プレハーノフやストルーヴェ等よってのみならず、レーニンやスターリンによっても「ユートピア」視された。」 145P・・・「ユートピア」として切り捨てられたけれど、マルクスの進歩史観的なところからの転換としての意味はもっています。やっとな、現在の的に晩期マルクスの転換としてとらえ返しの作業がなされています。

「そのような改良農業が、各地の多くの人びとによって、収穫増大のためのすぐれた農耕方法であるというように確認されたとき、農学は、いわば経験科学的なものとして、その歩みを開始したとってよい。」 150P

「フランドルやブランバン地方からイギリスに導入され、そこで発展せしめられた後フランスやドイツがイギリス経由で自国に導入したものは、資本制農業であり、その技術的基礎をなした「新穀草式」農法および「輪栽式」農法であった。したがって「改良農業」とは、資本主義的価値判断とそれに適合的地力概念と密接不可分のものであり、そのようなものとしての農学に導かれて発展したといえることができる。」 151P

「第一に、いずれのばあいであれ、「改良」とは収益の増大にほかならなかったし、したがって第二に、あらゆる改良は土地の囲込み=土地利用の自由に結びついていた。」 152P・・・収穫の自由と囲い込み

「自然科学の立場からの近代農業の消極的側面の展開は、リービヒの不朽の功績の一つである」というのは、『資本論』のなかのマルクスの言葉であるが、このようなマルクス(およびエンゲルス)の評価とはまったく対照的に、科学者や農業経済学者、歴史家たちは、十九世紀半ば以降今日にいたるまで、ほとんど一様にリービヒを非難しつつきてきた。」 167P

「マルクスが、「人間と自然との間の物質代謝 Stoffwechsel」というとき、それは、人間が自然的・類的・意識的存在として自然との不断の交流過程のなかで生きるということであり、したがって、動物のばあいとは異なって人間のばあいには、単に彼の肉体的生活が自然とつながっているだけではなく、彼の「精神的な生活が自然と連関」しているということ、そしてさらに、自然とのかかわり合いそのものが「労働過程」を媒介として行なわれるということの意味している。」 171P

「マルクスにとっては、社会的生産のいずれの「歴史的形態からも独立させ」て、「諸使用価値の生産」過程として「抽象的に考察された」労働過程論は、「労働の……社会的な生産諸力と同様、その自然によって制約された生産諸力も……資本の生産力として現象する」資本制生産様式そのものの理論的・歴史的解明のために必要であったのであるが、そればかりではない。それは、彼の人間解放の思想にとっての基本的資格を与えるものでもあった。そのことはたとえば、労働過程は「人間と自然との物質代謝の一般的条件であり人間生活の永遠的な自然条件」であるという彼の言葉、あるいは、そうした物質代謝過程をもって結びついている人間の自然力(=労働力)と土地の自然力こそは人類の永遠の「富の源泉」なのであって、したがって、労働のみが「すべての富の源泉である」というようにいうことは、「人間があらゆる労働手段と労働対象との第一の源泉たる自然にたいして、はじめから所有者として対し、この自然を人間の所有物として取り扱う」「ブルジョワ的ないい方」にすぎないという彼の批判にあらわれている。」 173P

「人間にとっての自然と人間自身の自然が、人間の歴史のなかでどのように生成してきたのか、そしてどのように生成していくのかという点の把握が彼の人間解放の思想の基本的立脚点であったとすれば、そのような彼の自然認識において、とりわけ人間と土地との物質代謝の把握において、リービヒの思想と科学が十分に生かされるのであった。」 174P

「いいかえれば、リービヒにおいては、自然は人間を含む動物と植物との物質代謝過程として「生きている自然」であり、そのような意味で、「人間がいなくても継続する」とはいえ「人間が加わりうる巨大な循環 ein großer Kreislauf」として把握される。したがって、「自然諸法則のなかで最も普遍的なもの」である「補充の法則」 Gesetz des Ersatzes——すなわち「諸現象はそのための諸条件が回帰し同じ状態を保持するばあいのみ永続しうるという法則」——こそは、人間と自然との物質代謝過程とりわけ人間と土地との物質代謝過程の根幹をなす農業のあるべき姿を判断する準拠をなす、ということになる。／マルクスが「リービヒの不朽の功績の一つ」とした「近代農業の消極的側面の展開」——すなわち資本主義農業の自然科学的批判——は、すでに述べたように、リービヒと彼の論敵との激しい論争の過程で次第に明確化してゆくのであるが、しかし、上述のような、人間および動物、植物の生命諸条件の完全な循環＝補充という彼の農学に一貫している基本的思想からすれば、そうなる必然性は初めからあったといつてよい。」 175P

「すなわちリービヒは、自然の循環に基礎をおく彼の思想を、「すべて経験主義的」に、したがって、「処方箋だけで作用の説明がない」東洋的な形で展開するのではなくて、科学的裏づけをもって展開するのであった。」 176P

「リービヒのばあいは、それを「有機質的自然と無機質的自然との間に存在」する「驚異的な連関」——つまり自然の循環——の謎をとく鍵として位置づけ、しかも、そのような

ものとしての「植物栄養の化学的過程」に関する理論をもって、当時支配的であった肥料の効用に関する「腐敗説」Humustheorie——およびそれに代わって登場してきた「窒素説」Stickstofftheorie——を科学的に批判するのであった。」179-80P

「つまり、「私の水車に対する最大の給水源は私の論敵の方にある」というリービヒにとっては、一〇年以上にもわたる論争およびそれにとまなう実験が、彼の「無機質説」の内容を豊富にし明確にする結果になったと同時に、ある種の肥料をもって収穫とりわけ利潤の増大のみを計り、土地の自然力の荒廃などには関心をもたない近代的農業者への批判としての性格を明確にする結果にもなったのである。なぜなら、人間と土地との物質代謝が「無機質論」的に明確にされるということは、当然のことながら「合理的農業」論の「無機質論」的展開を意味するものであったからである。そして、リービヒの「合理的農業論」を基準とする現状認識が、資本制農業批判として展開されたとすれば、彼の歴史認識が過去の農業——とりわけ休閑とか輪作とか厩肥——に対する批判となってあらわれるのであった。」182-3P

「実際、リービヒのいう「収穫漸減の法則」とは、彼の「最小養分律」——すなわち、土壤中の各種植物栄養素のうち、それぞれの必要量に対して最小量しか存在しない栄養素が「収穫の量および収穫可能年数を規定する」——と密接に関連している自然科学的性格のものであり、「二倍の労働は二倍の養分を吸収可能にするわけではない」ということなのであった。」183-4P

「それゆえ、リービヒによれば、土地の肥沃度は「特定作物の生育に必要な植物栄養素のすべての量に比例」するものであり、したがって肥料は土壌と作物の性質に応じて適正な比率をもって配合される必要があるし、農産物の販売によって失われるそれぞれの養分量と各種肥料の必要量とを「経営管理のうまくいっている工場の会計簿のように……正確に記録」しておきさえすれば——そのために化学者と農業経営者が協力すれば——「合理的農業に到達しうる」ことになる。」184P

「……さきの個所でマルクスが引用しているリービヒの言葉——「さらに細かく粉碎し、繰り返し犁耕することによって、有孔性土壌内部での空気の流通は助長され、空気の作用をうける土壌面は拡大され更新されるが、しかし、容易に理解されるように、耕地の収穫増大は充用される労働に比例するものでありえず、ずっと小さい割合で増加するにすぎない」という指摘——は、むしろマルクスが同じ個所の本文でのべていること——すなわち、「資本制農業のあらゆる進歩は、ただ労働者から掠奪する技術における進歩であるだけでなく、同時に土地から掠奪する技術の進歩であり、また、ある与えられた期間内に土地の肥沃度を高めるためのあらゆる進歩は、同時に肥沃度の耐久的源泉を破壊せしめるための進歩である」といういわばリービヒ思想の真髄——につながるものであることがわかる。」184-5P

ロシアの土壌学者のリービヒ無理解 185P・・・・マルクス・レーニン主義者の無理解？

「有機質論」＝「フムス説」188P——必ずしも否定ではない 195P 註(5)

「したがって、リービヒ流儀にいえば、「三圃制」とは三年分の収穫を二年でとることであり、「厩肥農業」Stallmistbetrieb は、農産物を販売せず、人間および家畜の糞尿、麦わらなどをすべて肥料として土地にかえす自給自足の経営を前提するかぎりにおいては、完全

に「合理的経営」たりうる——すなわち 完全に地力を維持できる——性格のものである。」

189P・・・自給自足的でない、「合理的農業」たりえない？

「——すなわち、収穫高だけで肥料の効用をはかる——「実際の農業者」や多くの化学者たちが、ますます窒素肥料万能論的傾向を強めていくからであった。」191P・・・窒素肥料万能論批判

「彼ら(ローズおよびギルバート——リービヒの論敵、「風車の水」)にとっての唯一の現実である資本主義的農業にとっては、誰がつくったものでもない——したがって、経済学的な意味における価値をもたない——自然力が計算に入らないのは当然だったからである。」

193P

「そしてマルクスは、すでに見たようにリービヒの「農業史に関する概観に……卓見」を見出すと同時に、とりわけ彼のこのような「近代農業の消極的側面の展開」を「リービヒの不朽の功績の一つ」とし、さらに『資本論』の草稿を書きおえた後においてもなお、「鉍物肥料論者と窒素肥料論者とのあいだの論争」のその後の経過に関心をよせたのであった。それはいうまでもなく、リービヒの農業史に関する概観が、ラスパイレスのというような意味で「唯物史観」的だったからではなく、人間と土地との物質代謝という観点からする彼の農業の発展過程に関する把握をマルクスが評価したからであり、そしてまた、同じ観点からするリービヒの資本主義的農業の現状認識が、『経済学・哲学草稿』以来の——とりわけ『資本論』における——マルクスの資本主義批判あるいは経済学批判の基本的視角に通じる面をもっていたからであった。」193P・・・マルクスのリービヒ評価のまとめ的文

「・・・・・・「自然にたいしてははじめから所有者として対し、この自然を人間の所有物として扱う」のが、ブルジョワ的な自然把握だからである。」196P

「テナント・ライト(tenant right)の補償」197P

「ところで、人間と自然との物質代謝そのものが商品形態をもって行われるというところに資本制生産の基本的特徴があるというならば、その基礎をなす「都市と農村との分離」は、「人間と土地との間の物質代謝を……攪乱する」第一の要因であるばかりか、ひいては「都市労働者の肉体的健康と農業労働者の精神生活を破壊する」ことになる。」198P——

203P 註(16)エンゲルス「人間の解放は都市と農村の対立が廃止されてはじめて完全となる」

「それは要するに、農業そのものを人間と土地との間の物質代謝過程として把握するリービヒの「無機質論」が、論争と実験を通じて行われた現実とのかかわり合いのなかで、土地——その自然力——は人類全体の財産であるという視点を獲得したとき、いわばその必然的な結論として展開することになった資本主義的農業の消極的側面に対する自然科学的批判であったといえる。」200P

「公害や自然破壊の深刻化とともに、人びとはいま「有機農業」を再認識し、エコロジーに再び関心をよせている。第二次世界大戦中における食料増産その他による牧草地の開墾や輪栽式農業(すなわちヨーロッパ的「有機農業」)破壊に対する反省がエコロジーの発展となったとすれば、「フムス論」的有機農業論も、それ自体資本主義批判のあらわれであるにちがいない。しかし、公害等の本質的批判のためには、リービヒを引用しつつマルクスが、平均労働時間を一〇時間に制限したイギリスの工場法(一八五〇年法)をグアノ肥料にたとえたことを思い出しみる必要があるであろう。」201-2P——註(26)「工場労働の制限は、

イギリスの耕地にグワノ肥料を注がせたのと同じ必然性の命ずるところだった。一方の場合には土地を疲弊させたその同じ盲目(ママ的な掠奪欲が、他方では国民の生命力の根源を侵してしまった) 204P

たわしの読書メモ・・ブログ 575

・ナオミ・クライン『**貧困と不正を生む資本主義を潰せ 企業によるグローバル化の悪を糾弾する人々の記録**』はまの出版 2003

ナオミ・クラインさんの本、環境破壊——気候変動問題で、「読書メモ 570・ナオミ・クライン／幾島幸子・荒井雅子訳『これがすべてを変える——資本主義 vs.気候変動 上・下』岩波書店 2017」を読んでいます。この本は、そこから波及して買ったというわけではなく、スーザン・ジョージさんの本の連続学習をしているときに買っていた本です。積ん読していたのですが、わたしの蔵書をチェックしていて発見し、読んでおこうと引っ張り出しました。この著者は、ジャーナリスト的に動く中で、運動的にも参画していったひとです。この本はまさに、新自由主義的グローバリゼーションの進行の中でまさに資本主義の矛盾が激化していくなかで、その矛盾に対して立ちあがった、反サミットやさまざまな企業や資本側の国際機関の会議への反対運動が 20 世紀末から起きました。その闘いの記録のような本です。前に読んだ本は、その中から、気候変動問題を見ないようにしていたことがあり、そこから転換して、気候変動問題に留目して書いた本です。それ以前は、幅広く反新自由主義的グローバリゼーション批判をやっていたのです。

さて、スーザン・ジョージさんの本は、経済学的なところを押さえながら、新自由主義的グローバリゼーションとか<帝国>的グローバリゼーションとかいわれることの批判を展開して、それを「オルター・グローバリゼーション」ということで突き出し、「もうひとつの世界は可能だ」というスローガンを突き出しもしています。この本の中で、この本の著者は、ATTAC というグループを引っ張って動いていたスーザン・ジョージさんをマルクス主義のインテリゲンチヤという規定をしています。わたしは、スーザン・ジョージさんの本の学習の中で、「もうひとつの世界は可能だ」という突き出しをしても、そのイメージが湧いてこない、むしろ 1990 年を前後するソ連邦の崩壊と東欧の「社会主義」を自称する「衛星国」の崩壊の中で、マルクス葬送の流れが出てくる中で「マルクス主義」隠しをしているのではないか、というようなことを書き、ちゃんと「マルクス主義」の流れから出てきた運動の総括が必要だというようなことを書きました。

さて、この著者は経済学的な押さえは、スーザン・ジョージさんより弱いのですが、運動的なことを紹介している本なので、スーザン・ジョージさんの本を読んでいてわからなかった運動的なことをこの本で押さええました。

まず、あの時期に、二〇〇一年「9・11」起きたのです。丁度、この本はそれを挟んで雑誌に書かれた原稿を集めた本なのです。ですから、わたしは反サミット運動がどうしてしぼんでいったのか、よくつかめなかったのですが、「9・11」後の「テロとの戦い」の中で、この運動の実力闘争的展開自体をテロ規定をして、戒厳令的に強権的につぶしていったという過程がこの本から明らかになります。著者のこの本の論攷にも、「テロとの戦い」

という名目に誤魔化されているような、引きずられさも出てきています。

さて、この反サミットの運動の特徴は、いろいろな団体がいろんなテーマを掲げて活動しているということです。この本の中で、メキシコのサヴァニスタの運動が取り上げられています。マルコス副司令官(「副」です)はマスクをして匿名的に動き、しかも政権を倒したら身を引くというようなスタイルです。これまでの、国家権力の奪取という運動形態を否定しています。確かに、必ず反革命的巻き返しがあることがあり、それをどうするかという問題があるのですが、そもそも、以前の権力奪取型の運動ではない運動として突き出しています。そのあたりは、同時に、政治中枢の制度要求的な運動と、草の根的な運動の相作論的な運動の展開として、新しい可能性がそこにあると思います。

このあたりは、「議会制民主主義は支配の一形態」というエンゲルスの規定で、民主主義批判があったのですが、「民主主義とは国家主義の反対語」というところでの、民主主義の意義を見出していくというわたし自身の変遷や、インターネットによる直接民主主義への道というところでの、新たな民主主義論の展開をわたしは考えています。

なお、この本の原著のタイトルは「Fences and Windows」です。かなり隠喩的、文学的表現で、それが本文中にも出てくるのですが、残念なことにそれが消し去られています。それらを、「資本主義を潰せ」という展開にしているのですが、内容的にそうなっているかどうか、もう少し、「資本主義」ということの内容展開からする、反資本主義的展開もと、いつものないものねだりです。

## 映像鑑賞メモ

たわしの映像鑑賞メモ 060

・TBS 報道特集「徹底検証！「旭川いじめ」学校はなぜ認めないのか」 2021.11.27 16:30  
～17:51

旭川の中学校で、女子生徒がいじめられた苦しみから逃れられず自死しました。いじめがあったのは明々白々なのに、学校・教育委員会が認めず、雪の中に薄着で出て行って公園の中で凍死したのです。発見されたのは雪が解けてから。これは、表面的には自死ですが、他殺と対語の自殺ではなく、いじめた子どもたちといじめを阻止しなかった・認めようとしなかった学校・教育関係者による殺人です。

お母さんが学校側と交渉している中で、教頭が「(いじめた側の)10人と1人とどちらが大切か、10人を守る」などと言っていたという話も出ていました。ひとの命を数の問題にしているようです。どっちが加害者でどっちが被害者なののでしょうか？ それに、そのいじめは他にも起きます。いじめをしていた子どもたちの将来を考えたら、ぞっとするのはわたしだけでしょうか？ きちんと反省させるように導くのが教育なのではないでしょうか？ いじめをしている子どもたちも救わねばならないのです。結局、学校と組織と自分(たち)を守るための詭弁です。その他のいじめ事件も取り上げていました。学校は腐りきっているのです。金平キャスターが、「子どもの世界は大人の世界の合わせ鏡」という話をしていました。まさに、今の社会も腐りきっているのです。

どうしていじめが起きるのかということをもっと掘り下げて、教育を、社会を変えていく道筋を見出していかななくてはならないのです。

たわしの映像鑑賞メモ 061

・TBS 報道特集「強制連行」を巡って追悼碑撤去の波紋 2021.12.11 17:30～18:41

太平洋戦争の時、朝鮮半島のひとたちや中国人捕虜を「強制連行」して日本で働かせたという歴史があり、その追悼碑が日本のあちこちにあるのですが、「強制連行」という文字があったり、その碑を作ったひとたちが「強制連行」という言葉を使っているとか言って、それを撤去させようという「運動」が起きている、という報道特集です。「強制連行」の話は、「従軍慰安婦」の問題でもあるのですが、この徴用工の問題は「強制連行」はあったという資料もきちんとあり、この番組でも流されていました。それを、なかったことにしようという、いわゆる「歴史修正主義」の動きです。ドイツでもネオナチのひとたちが「アウシュビッツはなかった」ということまで言い出し、日本でも「従軍慰安婦」もいなかったという右翼の主張も出ています。そのようなところで検定教科書の改変も出てきています。論点をすり替え、一部自ら進んできたひともいた(これさえも植民地支配のなかで追いこまれている側面もあるのです)という話を、「強制連行はなかった」という話にすり替えています。

恐ろしいのは、日本維新の会が、「強制連行はあったのか」という質問書を出し、「強制連行」という言葉は使わない」と閣議決定したという話です。それが撤去運動とシンクロしているのです。日本維新の会で共同代表になった馬場議員がインタビューに答えていたのですが、「みんなが強制連行で連れてこられたわけではない」と意味不明のことを言っていました。碑に「みんなが強制連行で連れてこられた」と書いているわけではないのです。一部違うひとがいるのを強調して、その問題自体がなかったことにする右翼の常套手段なのです。

これまでの「侵略と植民地支配」やこれらの問題での「謝罪」が出ていて、一方で自民党右派から、「いつまで、謝ればいいのだ」という文言が出ていますが、およそ、そのような発言は、謝罪の意味も分からない、謝罪をリセットする動きで、今回の閣議決定自体が、謝罪をリセットすることだということが分からないのでしょうか？

日本維新の会は自分たちがシンクロしていた自民党右派の安倍元首相とそれを継承する菅政権が崩壊し、保守岸田政権になって、野党色を出してきています。これは、今回（「反障害通信」114号）の巻頭言に書いた、まさにファシズム的な動きなのです。

維新の会は政権与党には名目的にはなっていません。だから対右翼政党として批判していくことです。ですが、最も謝罪のリセットの一つである靖国参拝を政権与党の自民党議員が繰り返していて、なにが「いつまであやまればいいのだ」ということが言えるのでしょうか。閣議決定をとりけし、靖国参拝する与党国会議員は自らの政党から除名することです。安倍元首相は首相を辞めた途端、靖国参拝しました。およそ、責任の概念のない、政治家の資格がないとしかいいようがありません。こんな政治をいつまでゆるしているのでしょうか？

## インターネットへの投稿から

2021.11.27 維新の政治屋橋下徹元大阪府知事元大阪市市長

橋下徹元大阪府知事元大阪市市長は維新別働隊(政策理念・マスコミ対応広報担当)の政治屋(無責任放言者)ではないでしょうか？

「反差別原論」への断章(42)

### そもそも「社会主義」とは何だろう??

最近、マルクスの『資本論』とかが読まれているとか、斎藤幸平さんの『人新世の「資本論」』がベストセラーになっていたりしているのですが、「障害者運動」でリーダーシップを発揮し、理論的にも注目してきたひとが、SNSとか「障害学」関係のメーリングリストで、突然「わたしは社会主義者ではない」とか言い出して、何のことか考えていました。何か問いかけての応答かもしれませんが、運動を広げるために宣言しておく必要でもあると考えたのでしょうか？わたしは、運動を広げるためには余計な規定をしない方がいいと思っています。リーダーシップをとっているひとが、そのような「〇〇でない」発言をすると、その規定での指向性をもっているひとは離れて行く、その運動に入ることなくなる可能性があります。

とにかく、それで「そもそも「社会主義」とは何だろう??」と考えていました。電子辞書で、国語関係の辞書や百科事典を検索してみたのですが、何かちゃんと整理しているものがみつからず、自分で文を書き起こしてみようと思います。ちゃんと文献的なことを押さえながらの論攷ではなく、わたしの思い巡らす風の文として展開します

#### 資本主義に対置される社会主義

社会主義という概念が生まれたのは、資本主義のなかで、「資本主義社会の矛盾を解決するのが社会主義」ということでの始まりではないかと思います。それで、「資本主義の矛盾」ということが何か、が問題になります。ちゃんと押さえないままに、社会主義的なことを突き出そうとするひとたちがいて、その一部のひとたちをマルクス/エンゲルスは「空想的社会主義者」と批判しました。その他資本主義の分析をきちんとしないままの変革志向の自称「社会主義者」もいました。マルクス/エンゲルスは、そもそも「共産主義」ということばを使っていて、「社会主義」という言葉を使っていたのは、アナーキストたちではなかったのかと、思ったりしています。アナーキストといってもいろんな思想の持ち主がいたのですが、マルクス/エンゲルスは当時かなりの勢力のあったアナーキストたちとのせめぎ合いをしながら、運動を進める必要があったのです。アナーキストの流れの社会主義といっても、一揆主義ともいわれるブランキや陰謀主義のバクーニンなどさまざまですが、マルクスがプルードンの『貧困の哲学』への批判として、唯物史観的な観点から『哲学の貧困』を書きました。そして、「資本主義の矛盾とは何か」というところで、『資本論』を書いています。で、マルクス自身は「社会主義」ということばは余りつかっていないようなのですが、マルクスの流れから出た党派は、その後「社会民主主義」ということで、「社会民主党」を名乗ることになります。これも、アナーキスト的な「社会主義」の一部が、

民主主義的でない(民衆の意識と遊離した)テロなどの行使を展開していたので、それに対置して「民主」ということばをいれたのでないかと思っています。ですから、社会民主党の名を冠したボリシェヴィキが政権をとって、アナーキスト的な流れを排除していく過程で(そのこと自体の批判はここではさておきます)自らの思想の流れがマルクスの流れとしてあるというところで、「共産党」の名を突き出したのだと思います。

### 社会主義と共産主義との関係

さて、わたしは「社会主義とは資本主義社会の矛盾を解決しようということ」と仮規定しました。その「矛盾とは何か」、ということをつきつめない曖昧模糊になってしまいます。いやむしろ、曖昧模糊のままでも(それなりに分析はあったのでしょうか)、とにかくその解決のための運動が社会主義運動だったのだといえるのでないでしょうか？

で、単に資本主義社会のみならず、「すべのこれまでの歴史は階級闘争の歴史であった」として階級なき社会をめざすとしたのが、マルクス/エンゲルスの「共産党宣言」でした。そして、階級社会の創出と矛盾を「分業と私有財産制」と押さえそれを止揚するのが共産主義だと突き出しました(『ド・イデ』)。これはどこまで定式化されているのか分らないのですが、その共産主義の初期の段階が社会主義だと規定されたのです。この定式はわたしの「社会主義とは資本主義社会の矛盾を解決しようということ」と矛盾しません。

### 「社会主義」をめぐる混乱

さて、ここで現実の運動の中で「社会主義」をめぐる混乱を指摘して措かねばなりません。ロシア革命が起き、それを社会主義革命が起きたとされました。それで、その後のスターリン体制での粛正が起きました。それだけでなく、官僚的支配体制、KGBを使った弾圧体制を構築しました。「社会主義」に対する負のイメージが形成されました。それはロシアだけでなく、カンボジアにおけるクメール・ルージュの大虐殺。そして中国における、文革や天安門事件、鄧小平による「先富論」など。そして、1990年を前後するソ連邦の解体と東欧諸国「社会主義国」の崩壊。それらをもって、「資本主義の社会主義への勝利」という言説さえ出てきました。そういう中で、マルクス葬送ということが語られ、多くの左翼や左翼知識人が、マルクス思想や社会変革志向から離れて行きました。そして学問を目指すひとたちがマルクスを冠した学問を忌避する事態も生まれました。

ですが、そもそも崩壊したソヴィエト連邦や東欧諸国の「社会主義」を自称していた国は「社会主義国家」だったのでしょうか？ かつて右翼は「社会主義国家」というだけではなく、「共産主義国家」などと呼んでいたのですが、「国家が共産主義社会では死滅している」という規定からして、国家と共産主義はアンチノミー(同時に存立しない)とちゃんとマルクスを押さえているひとたちの間では笑い話にされていました。今日、「社会主義国」と言われていた、まだ自称する国も、「国家資本主義」だと、少なくとも右翼も含めて理論を問題にするひとたちの共通認識になってきているようです。「社会主義の変節」とか「裏切られた革命」とかいう言葉もありますが、ロシア革命など今までの歴史は、「プロ独」から社会主義への移行に失敗した、そもそもまだ「社会主義国家」というものは定立した歴史はない、とわたしは押さえています。

### まとめ

話を最初の「わたしは社会主義者ではない」という宣言に話を戻します。現実には起きた

「社会主義」や「共産主義」を自称するひとたちの運動の負の側面は、きちんととらえ返し反省しなければならない、批判しなければならないのですが、それはスターリン主義批判、更にはレーニン主義批判、マルクス・レーニン主義批判として実際に検証する作業が起きてきています。ですが、「わたしは社会主義者ではない」とまで言ってしまうと、そもそも「社会主義とは何か」という規定なしには、何も語らないに等しいか、単に信仰告白のようなことに過ぎないのですが、「わたしは、現在社会をすばらしい社会であると思っている」とか「資本主義を賛美する」とか、「市場社会はなくなる」「資本主義はなくなる」という主張になっていきます。それだけではありません。差別ということが資本主義社会の維持のためには必要な矛盾としてあるともわたしは押さえているのですが、資本主義社会を容認してしまうと、差別も承認してしまうか、「差別はなくなる」という論理に同調してしまうことになります。それでも、モグラたたきのように、絶望的な思いで差別を糾弾していくことになるのでしょうか？ そんな絶望的運動は広がりをもたなくなるのではないのでしょうか？ 「共産主義者」ということには、差別的な考えから解放されたひとという意味ももっていて、現実的に資本主義社会という差別社会に生きて来て、差別社会を変えないで差別的な考えから無縁なひとなど、存在し得ないのです。社会主義を「共産主義の初期的段階」という規定をすると、この差別をめぐる規定でも「差別的な考えを解消しようと模索しているひと」という意味も持っています。この規定からすると、「わたしは社会主義者ではない」と突き出すことは、まだそこまでさえ至っていないという反省の上に立った発言か、差別主義者であることの居直りの発言になってしまうのではないのでしょうか？

もっと幅広く考えると、自分の運動をもう辞めてしまうということではない限り、問題は、現在の社会をどう考えているのか、現在の社会に順応して生き得る社会と考えているのか、それとも、現在の社会に生きがたさを感じ、変えたいとしているのかの問題です。後者でしたら、それはわたしの規定では左派であり、広い意味では社会主義者なのだと思います。別にわたしは自分の「社会主義規定」を押し付けるつもりはないのですが、余計な規定をして混乱を招くだけではないかという思いから、あえて提起をさせてもらいました。

### (編集後記)

- ◆今回は、やっとな「読める範囲」の少なめに抑えました。
- ◆巻頭言は、ファシズムに関する文です。ファシズム論の必読書と言われている、ハンナ・アーレントをまだ読んでいません。アーレントは、わたしがベースにしているマルクスとどう交差するか分かりません。マルクスの歴史三部作に、ボナパルティズム論があり、それは後進国ファシズム論と言われていること、再読したいとの思いがあります。ファシズム論は大きな課題にしていたこと、改めて文にします。
- ◆「読書メモ」は、追加学習、農業問題はエコロジーともリンクしていきます。マルクス以後のマルクス派が弱かった、そしてそのことが運動的にネックになった分野です。このことの学習の続きも課題ですが、はたしてそこまで広げられるかどうか？ もうひとつは、

以前買っていていつものように積ん読していた本を読めました。

◆映像鑑賞メモは、TBSの報道特集から二つ、いじめ問題と巻頭言とリンクすること。

◆巻末に「社会主義」についての文を書きました。本文中にも書きましたが、「わたしは社会主義者ではない」というような話が出ています。マルクスの『資本論』が読まれている今のトレンドとは逆の、むしろ、従来通りの流れなのですが、一九九〇年を前後する「社会主義国家」、実は国家資本主義の崩壊の中で、出てきた「マルクス葬送」の流れから来ていると思えるのですが、それをきちんと「国家資本主義」でしかなかったと押さえることから、なぜ社会主義の定立に失敗したのかと押さえ直す作業が今問われています。日本における社会変革志向の運動の総括をきちんと成し遂げる中で、絶望に陥った社会変革運動の方向性、反差別運動の方向性を提起していかなければならないとも思っています。このところ読書メモが少なくなっているのは、その主旨でわたし自身の運動の総括ということも含めたこの課題で、過去の運動関係の本を読んでいるからですが、それをどういう形でまとめていくかの方針がまだ立っていません。とりあえず、資料を読んでメモを残す作業をしています。

◆コロナウィルスは、新たなオミクロン株が出てきました。まだ、よく分からないのですが、出口になるかも知れないとの思いが湧いていたら、そんな話は、マスコミでも出ていました。ですが、ほんとにまだ分からないです。暫くはそのままの感染症対策を続けるしかありません。

◆安倍前首相が、何かの会議で、MMT理論のような話をしていました。「1万円札はその印刷に一枚2円ぐらいしかかからないから、どんどん刷ればいい」。麻生太郎前財務大臣も大臣時代に財務省の見解と違う同じような話をしていたのですが、よくも無責任な話が出来るものです。安倍元首相はまさに重しが外れたように自らの思想性を直裁に出して、あちこちで無責任放言を出してきています。

◆MMT理論には恐慌論がありません。もう、恐慌など起きないということまで出ているのですが。貨幣は三つの機能をもっています。流通貨幣、退蔵貨幣、そして信用貨幣です。なぜ、2円しかししないものが、1万円の商品と交換出来るのか、それは信用貨幣だからです。どんどん刷ればインフレが起きて信用貨幣として破綻するのです。そんな理論を振り回しているひとたちは、論理というものがないようです。

## 反障害－反差別研究会

### ■会の方針

「障害とは何か」というところでの議論の混乱が、「障害者運動」の方向性を見出していく作業を妨げています。イギリス障害学が障害の医学モデルから「社会モデル」への転換をなそうとしました。しかし、もう一段掘り下げた作業をなしえぬまま、医学モデルへの舞い戻りという事態が起きているようです。また、各国で差別禁止法とか「解消法」が作られていますが、そこでのモデルは結局医学モデルでしかない状態です。この会でやろうとしている議論・研究は、障害問題を解決していくための「障害者運動」のための理論形成の

ためにあります。会としては「社会モデル」から更に、関係モデルへの転換を提起しています。実は、日本の「障害者」の間では、既にこの議論を先取りするような議論もなされていきました。そのことが整理されないままになっています。改めてそれらのこととらえ返しながら、議論をすすめて行きたいとも思っています。また、障害と差別はかなり重なる概念です。他の反差別運動の中での議論や認識論的議論も織り込みながら、議論を進め理論形成していきます。そして、「差別はなくなる」とか「社会の基本構造は変わらない」という意識が、今のこの社会を覆っていきます。そういう中で、今の社会の枠組みに限定した議論になっていき、そのことが論の深化を妨げる事態も生じています。だから、過去の社会をかえようという運動の総括も必要になっています。そのことにも、差別ということをキー概念としながら議論していきたいと考えていきます。

#### ■連絡・アクセス先

Eメール [hiro3.ads@ac.auone-net.jp](mailto:hiro3.ads@ac.auone-net.jp) (三村洋明)

反障害—反差別研究会 HP アドレス <http://www.taica.info/>

「反障害通信」一覧 <http://www.taica.info/kh.html>

反差別資料室 C <https://hiro3ads6.wixsite.com/adsshr-3>

ブログ「対話を求めて」 <http://hiroads.seesaa.net/>

反差別資料室 A <https://hiro3ads6.wixsite.com/adshr1>